

秋の訪れは、まず気温の変化で感じられ、その後は景観であるとか、味覚であるとかの五感で味わい、そのうち、もの哀しさのような内面の物差しにふれるようです。中には、味覚ではじまって味覚で終わるといふ、幸福な感性の方もいらつしやるようですが、それもまた、風流な暮らし方だと再認識する昨今です。

さて、団員のみなさんの秋は、今、どの辺りの目盛りにとどりましたでしょうか？

十月二十日(土)の探偵団は、わずか三人の申し込みでしたが、伊藤団長の快諾で催行、太郎坊付近を案内していただきました。移動距離は短く、遊歩道も登山道をも外れた道なき道を、キノコやアリ塚を見ながら、ゆつくり歩きました。

富士山頂は見えませんでした、八合目あたりが見え隠れする中、太郎坊から草原へ、そして双子山をぬけて森の中を歩く、人間にはだれも遭遇しないコースでした。道中、パッチ状に地衣類があり、また、スコリアのアリ塚に比べて、風の少ない森の中のアリ塚は、こもりした形で、中に手を入れる

と、ぼかぼかしていたり、自然界の営みに、思わず足を止めました。アリは、植物の種や虫の死骸を巣に運び入れて食物にし、また小枝なども使って、見事に巣を造り、アリ塚完成させるようです。



< アリ塚に指を入れてみる >

特報 ツキヨタケの神秘にふれて

以前、ヤコウタケの撮影をされた伊藤浩美カメラマンが、この九月のある晩、ツキヨタケを撮影されました。ツキヨタケは、立ち枯れブナに着生するキノコです。人工的な明るさがあると、まったく見えない光を発します。

青木ヶ原樹海の夜八時、真っ暗な中に、ぼおっと浮かび上がるその姿は、今でこそ世にも珍しい光景で息がとまりそうですが、その

名のとおり、太古から月夜のような光を放つキノコとして、知られていたのでしょうか。そして、わずか数日の発光期間中、キノコからは無数の胞子が、あたり一面に飛散するわけで、それが彼らの生きる目的、繁殖の実態なのだそうです。



しかし、道路にまで飛散したその胞子は、たいへん毒性があり、撮影された伊藤さんも、体調が悪くなるほどだったそうです。自然界の生態も命がけなら、撮影もまた同様で、この神秘的な一枚の写真の向こう側に、生き物たちの厳しさが透けて見えましたら、きっと何かが報われる、という気もします。

堺 勳滂 懽娛幽 岬。

・ 厄半 ・ 勝岬化瀘

植物画の木村奈保子さんに団長をお願いして、ステンシルという既製の型紙を使い、富士山、コスモス、トシボを、自由に布に散らして、作品(37センチ×23センチ)を仕上げます(お持ち帰り)。今回は、室内での活動で、野外移動はしません。もちろん、初心者大歓迎です。

・ 開催日 十一月十五日(木)

・ 集合 午前十時

・ ガラリーエ・オム

・ 参加費 2300円

・ 材料費 500円

・ 持ち物 昼食・マイカップ・

中高年の方はメガネ

* 絵の具や絵筆、パレットなどは、

お貸しします。

○ 申し込み・問い合わせは三日前までに、電話かメールでお願いします。

■□□□□□□□□□□□□

◎なお、次回は、十二月十三日(木)、戸高雅史団長で日帰りコースを予定しております。

発行 杆・滂 懽 事務局

山梨県山中湖村平野一六九八

電話 〇五五五・六五・七〇二三